

モデル経営体名：荻野 浩（本庄市）

展開：土地利用型作物の生産効率化に係る展開

経営概要 48ha（水稲30ha、小麦22ha、ビール麦16ha、その他8ha）  
うち実証面積水稲25.5ha

導入技術①収量コンバイン・キセキ・HJ6130ZCSLWM  
②アグリノート・キセキ  
（個人で導入した生産管理システムに収量  
コンバインを連動させて実証組立を行う）

①



②



実証の状況

①実証の目的：

米麦二毛作地域において規模拡大を図るには、水稲直播技術の導入による労力分散が課題である。

本実証では収量コンバインによるほ場ごとの正確な収量データの収集とほ場管理システムによる栽培管理データを連動し、  
麦あと乾田直播栽培技術の確立を図る。

また、収穫時の籾水分測定に基づく乾燥時間削減と品質向上、肥培管理改善による経費削減を図る。

②実証状況：

令和3年度実証では水稲直播栽培の収量が少ないことが判明した。その原因を鎮圧不足による保水力、保肥力の低下と考え、  
鎮圧2回区を設定し、収量コンバインにより各区の収量を測定、比較した。

同一収穫日では籾水分量のほ場格差は小さかったため、籾水分量別の乾燥調製は実施しなかった。

区	品種	収穫日	収穫籾反収※1	乾燥籾反収※1	乾燥玄米反収※2	籾水分※1	減水深	作業時間※1
鎮圧2回区	キヌヒカリ	10月17日	731kg/10a	602kg/10a	482kg/10a	23%	8mm/日	0.22ha/hr
鎮圧1回区	キヌヒカリ	10月16日	625kg/10a	537kg/10a	430kg/10a	23%	18mm/日	0.22ha/hr
移植	キヌヒカリ	10月8日	756kg/10a	616kg/10a	493kg/10a	27%	10mm/日	0.23ha/hr

※1：収量コンバインで測定 ※2：乾燥籾反収から算定

③モデル経営体の感想：

鎮圧の回数を増加させたことにより水稲直播栽培の収量が向上することが分かった。収量コンバインの導入ではほ場ごとの収  
量を確認することにより、改善すべき課題が把握でき、収量や品質の向上を図ることができる。

籾水分データ活用は、次作の状況に応じて実施したい。